

2026年7月号 VOL.93

軽音楽部マガジン

発行：特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会

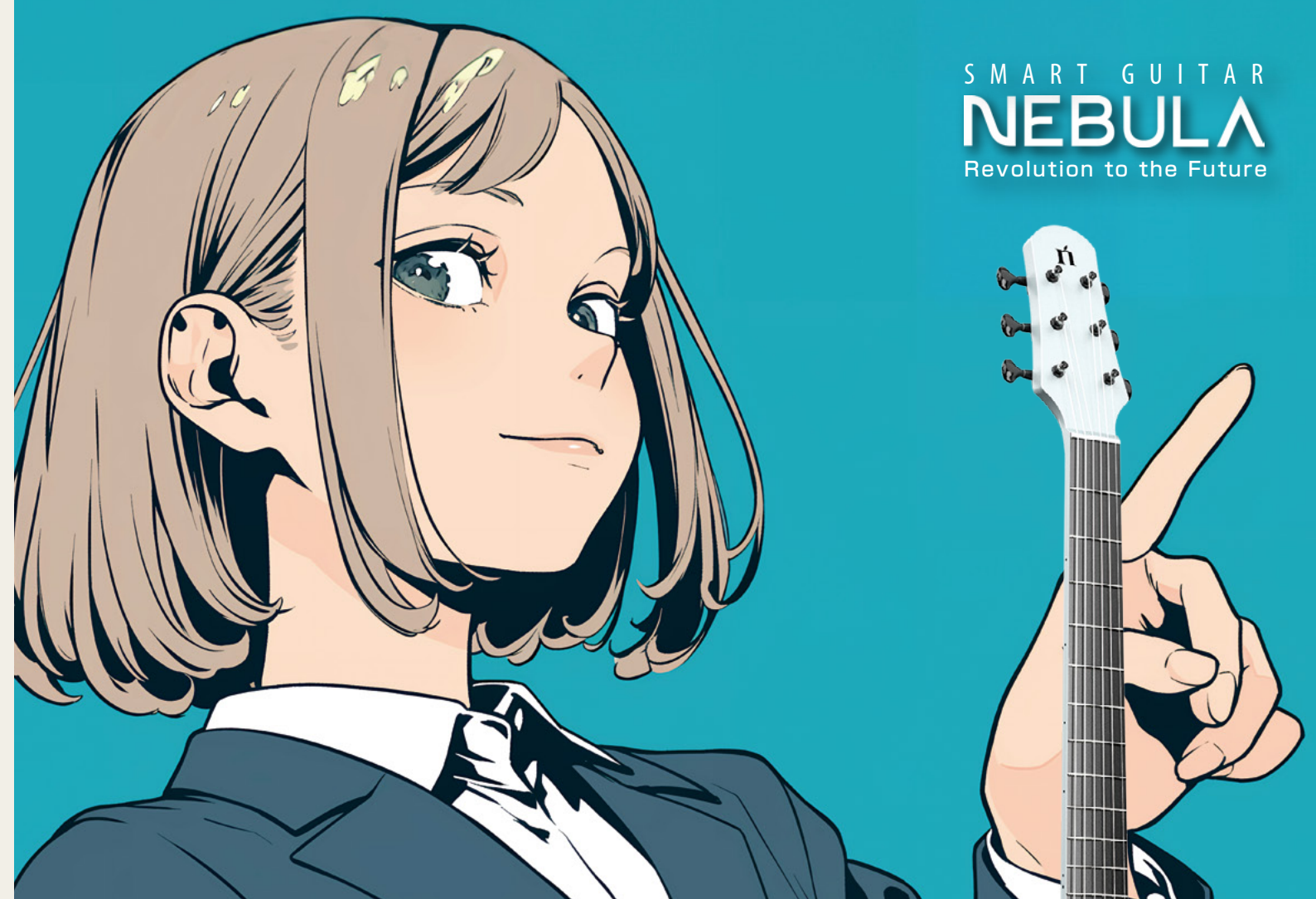
配布：全国 2,140 校の高等学校軽音楽部



第13回 高等学校軽音楽コンテスト中部大会より



軽音楽部マガジン
バックナンバー



SMART GUITAR
NEBULA
Revolution to the Future

ヘッドフォンで演奏が楽しめる スピーカー、エフェクト内蔵の SMART なギター

アンプへの接続はもちろん、ヘッドフォン端子やスピーカーを内蔵。軽くて丈夫なカーボンファイバーを本体に採用し、多彩な音作りを実現するエフェクターやチューナー、メトロノーム、ルーバーを搭載。いつでもどこでも「弾きたい!」と思った瞬間に演奏できる、スマートなギターです。

- 1 スピーカー搭載で、面倒な準備をスキップ
- 2 ヘッドフォンを接続すれば、夜間の演奏も◎
- 3 ワンタッチでエフェクトが切り替わる
- 4 豊富なエフェクト群を自由にカスタマイズ
- 5 演奏をサポートしてくれる様々な便利機能
- 6 USB Type-C 対応でギターの録音が簡単に
- 7 高温多湿に強く、軽量なカーボン素材
- 8 丈夫で使いやすい高機能なギグバッグ付属



**Summer
セール開催中!**



詳しくはこちら <https://1010digital.thebase.in/>

全国約4,800校の 高校に軽音楽部を！

※現在、軽音楽部があるのは**2,140校**です（令和8年4月1日当協会調べ）

軽音楽部の諸活動を通して若者の成長を応援しています

1 軽音楽部の正しい理解を

軽音楽部は部活動としての歴史が浅く、ポピュラーミュージックやバンドへの偏見も一部に残っており、正しく理解されていないのが実状です。STEAM教育の一端として、軽音楽を通じた部活動の有意義さや得られるものなどを学校内外へ広めていきます。

2 軽音楽部の全国普及に向けて

学校教育の一環である部活動のひとつとして、軽音楽部が全国の学校に設立されることを目指し、日々の練習や演奏会のサポート、楽器や機材の相談、各種クリニックや大会の開催など、諸活動をバックアップしていきます。

3 新しい活動の提案と支援

デジタル化、IoT化による現代的な楽器や機材、DTMの普及による新しい軽音楽のスタイルなど、今と未来に見合った活動を各業界とのパイプ役として軽音楽部に提案、支援しつつ、軽音楽のポップカルチャーとしての発展を目指します。

特定非営利活動法人
全国学校軽音楽部協会
keionkyo.org



全国学校軽音楽部協会

軽音楽部マガジン

令和8年7月号 VOL.93

■軽音楽部マガジン VOL.93 ■創刊：平成25年12月18日（水）■第15巻4号通巻93号
■監修・発行／特定非営利活動法人（NPO法人）全国学校軽音楽部協会 JASLMC（Japan Association of School Light Music Club）
〒224-0003 横浜市中区中川中央 1-37-6-405 TEL：045-913-0901 FAX：045-913-1900 E-Mail：info@keionkyo.org
■企画・編集／株式会社未常識

From Chief-In-Editor

「無から有を生む」という教育的定義 — 正解のない時代を生き抜く「創造」の羅針盤 —

新緑の季節を越え、夏の本番に向けて各バンドの音が熱を帯びる時期となりました。新入部員たちも組織の一員として馴染み始め、顧問の先生方におかれましては、個々の技術向上のみならず「バンドというチーム」がいかに成長していくかに心を砕かれていることと存じます。

本誌VOL.91では、軽音楽部を単なる個人の「趣味」に留めず、人間形成を目的とした「教育の場」へと昇華させる重要性を提言しました。そこでは顧問の役割を、技術を教える「ティーチング」から、生徒の自律を促す「コーチング」へと転換することを提案しました。続くVOL.92では、そのコーチングが結実する場である「大会」の在り方に触れ、他者との比較による外的な順位以上に、自分たちの納得感という「内なる評価」に重心を置くべきだと説きました。

そして今号、私たちがさらに踏み込んで議論したいのは、軽音楽部における活動の「究極の形」についてです。それは、自分たちの手でゼロから音楽を紡ぎ出す「オリジナル楽曲の制作」に他なりません。

1. 文化部活動における「創作」の特異性

オリジナル楽曲の制作は、部活動としての軽音楽部の在り方を根本から定義できる活動です。メンバーと共に、まだこの世に存在しないメロディや言葉を「無」から「有」へと生み出す創作プロセスは、他の文化部や競技には類を見ない、極めて純度の高い「教育的体験」です。多くのスポーツ競技には厳格なルールと勝敗を決めるスコアが存在し、明確な「正解」が可視化されています。しかし、音楽や芸術の領域は本質的に、数値で優劣を付けることが非常に困難な世界です。私たちは、この「数値化できないこと」こそが、学校教育における部活動の大きな意義であると考えます。競争や効率が優先される現代社会において、正解のない問いに向き合い、調和の中で自分たちの音を刻む。そのプロセスにこそ、学業だけでは得られない真の

成長があるのです。

2. 正解のない時代を生き抜く「表現者」への脱皮

現代は、かつてのような「既成の正解」が通用しない、予測困難な時代です。学校教育の多くが「用意された問い」に答える力を育む一方で、オリジナル曲の制作は、生徒自らが「問い」を立てることから始まります。既成曲のコピーは、技術習得において優れたプロセスですが、そのゴールは常に「外側」にあります。対してオリジナル曲にはお手本が存在しません。「自分たちは何を伝えたいのか」という内なる声に向き合い、仲間と対話を重ねて最適解を模索する。そこにはコピーでは経験し得ない迷いや衝突がありますが、その産みの苦しみを乗り越えた時、生徒は単なる「演奏者」から、主体的に意志を発信する「表現者」へと脱皮します。この経験こそが、未来を切り拓く「非認知能力」を育むのです。

3. 「共創」の精神が照らす未来

社会は競争だけで成り立っているわけではありません。他者と手を取り合い、新しい価値を創造し、多様な感性を認め合う。学業以外の活動である「部活動」の意義は、こうした「共創の精神」を体験的に学ぶことにあります。オリジナル曲を創ることは、自分たちの存在を肯定し、仲間の可能性を信じることです。大会を「他者を打ち負かす場」ではなく「自分たちの創作を社会に問い、自己を再定義する場」と捉え直した時、軽音楽部は最高の人間教育の場となります。

全国学校軽音楽部協会は、この「創作」という名の冒険に挑むすべての生徒と、その背中をコーチとして支え続ける顧問の先生方を、これからもサポートしていきます。

特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会 理事長 三谷佳之

ライブ本番までに
済ませておきたい

3つの準備

軽音楽部での活動や楽器の演奏をする上で、目標の1つとなるのが「ライブ」です。夏はただでさえ各地で大会やコンテストが多くなる季節。新入部員の1年生にとっては待ちに待った初めての「本番」という人も多いでしょう。ライブはその名の通り泣いても笑っても一発勝負。悔いのないステージを万全の体制で迎えるために、しっかりとした準備をして本番に臨もう！



ボーカリストとして

★余裕を持ったための準備 本番に向けてメンタル的な余裕を持つためには、早めにメロディと歌詞を覚えることが一番です。メロディと歌詞が早くから頭に入っていれば、発声やリズム、合奏、感情を込めた細かい表現といった「歌うこと」に意識を集中していくことができます。

歌詞を覚えるには自分で「書く」ことが効果的です。同時に「ブレス」の位置や歌い方などを書き込んでおくと、やるべきことが明確になっていきます。正確なメロディで歌えるように、ピアノアブリなどで音程確認をしておくといいでしょう。何となくではなく、歌のピッチが安定します。また、ボーカルが入るタイミングをきちんと把握することも大事です。イントロは何小節で歌が入るのか…などをしっかりと理解しておきましょう。

本番では歌うだけではなく、フロントマンとして客席に気を配りながらライブを盛り上げることもボーカリストの大事な役割です。楽器も演奏する人は覚えることが多

いので、早めに「やること」を覚えてしまいましょ。

★機材の扱い ボーカリストは、基本的にマイクとマイクスタンドが唯一の機材です。楽器を弾きながら歌う人は、マイクスタンドの位置や高さ、角度をシミュレーションして自分のベストなセッティングを見つけておきましょう。ハンドマイクの場合は、マイクの持ち方も普段から気をつけておかなくてはなりません。普段の練習場所とライブ会場では音響の環境が違ったり、モニタースピーカーにマイクを向けてたりしてハウリングを起こさないように普段から十分に注意しておきましょう。

学校にモニタースピーカーがあるなら、自分の声の返り具合を試しておくとも本番でも怖くありません。自分の声や他の楽器がどのくらい聴こえていれば歌いやすいかを知っておくと、サウンドチェックの時に指示しやすくなります。

★体調管理 体が楽器であるボーカリストが最も気をつけなければいけないのは体調管理です。風邪などをひかないようにすることはもちろん、喉のケアも忘れずに行いましょ。

本番の日が近くなったら大声で騒いだりせず、よく睡眠を取り、辛い物など刺激の強いものは控えましょ。また、本番直前の練習で頑張つて歌いすぎて喉が枯れてしまつこともあるので注意しましょ。

ギタリストとして

★フレーズのチェック 本番でベストなフレーズをするためには、できるだけ反復練習をして体で覚えていくしかありません。何度もミスしてしまうフレーズは本番でも間違える可能性が高いので、その部分だけ集中して繰り返し練習しましょ。しかし、それでも弾けないフレーズは余裕を持って弾けるフレーズに変えてしまつのも1つの方法です。これは逃げではなく、いわゆる「リスキマネージメント」というものです。

ギターソロやテーマメロディを弾く場合は、フレーズの最初と最後をよく練習しておきましょ。気持ち良くフレーズに入れたり綺麗に終わることができれば、結果として楽曲全体も良い印象になります。

★音作り ギターアンプは、できれば普段の練習から本番と同じ機種を使用してツマミの位置を決めておきましょ。エフェクターを使う場合も、練習中にしっかりと音作りをしておくことはもちろんですが、スイッチングするのであれば各音色のボ

リューム設定も忘れずしておきましょ。また、おろそかにされがちなのが音色を切り替えるタイミングです。小節の頭なのか、弾き始める1拍前なのか…。切り替えもフレーズの1つだと捉えて練習しておきましょ。

しかし、どんなに準備や調整をしても、本番のステージでは聴こえ方が変わります。すぐに微調整ができるように、アンプやエフェクターのことをきちんと理解しておきましょ。エフェクターを借りたり使い回したりするのはやめておいた方が無難です。自分が使い慣れているものでなければトラブルに素早く対処できません。

エフェクターを使う場合は、出番前にできる限りエフェクターボードに組んでおいて、ボードごとステージへ持って行けるようにしておくことセッティングが早くなります。シミュレーションしておきましょ。

★楽器の状態 弦は本番の前日に張り替えておきましょ。張り替えたらチューニングが安定するまで弾いて、弦をよく伸ばしておきましょ。しかし、それでも温度差によってチューニングは安定しないので、ステージに上がった後何度もチェックしましょ。また、張り替えただけの弦でも切れることがあるので、予備の弦の持参は必須です。

その他、接続ジャックやシールドケーブルといった電気系統の接触不良や、ネックの反りなどの楽器の状態も事前にチェックしておきましょ。

ベーシストとして

★フレーズのチェック ベースは、リズムとコード（和音）の両方でポトムを支える、アンサンブルにとって重要なパートです。自分のことだけにとらわれず、他のメンバーの音にも意識を向けられることが大切です。

具体的には、コード（和音）に対して自分が弾いている音が間違っていないか、ドラムが出すリズムやフレーズとのコンビネーションは悪くないか…などを、何度もチェックしましょ。

既存曲の場合、難しいテクニックが駆使されていることもあります。練習を怠らないようにすることはもちろんですが、どうしても弾けないフレーズは思いきって簡単にしてしまつことも、ミスが目立つベースには有効な手段といえます。

★機材の準備 ライブでは複数のベーシストが同じベースアンプを使います。サウンドチェックで作った音色や音量は忘れないようにメモしたり写真に撮っておきま

しよ。

広い会場になるとシールドケーブルをアンプではなく、ロー（ダイレクトボックス）につなぎます。これは、音響スタッフに任せておけば良いことで、自分で用意するものではありませんが、初めて使用する場合は使い方や音の聴こえ方、注意点などを先輩に聞いておきましょ。

エフェクターを使うのであれば、あらかじめ普段の練習の時に音作りをしておき、ライブ当日は微調整程度に留めましょ。事前の音作りを終えたら、蛍光シールなどで目盛りをマーキングしておく見えやすく便利です。また、本番で使わないエフェクター類は外しておきましょ。音の劣化が軽減されます。

★楽器の状態 弦は手汗や皮脂などで劣化し、徐々に音にハリがなくなります。弦の新しさによる音の違いには好みがあるので交換の時期は人それぞれですが、交換したばかりの弦はチューニングが狂いやすいので、演奏する前に何度も確認するようにしましょ。また、念のために予備の弦は必ず準備しておくと安心です。

楽器は使うにつれて状態が変わります。本番当日に音が出なくなつてしまつた…ということにならないように、本番日が近づいて少しでも心配なことがあれば、楽器店に持って行つてみてもらいましょ。シールドケーブルの断線やジャックの接触不良もよくあります。楽器と同じように普段から大切に扱いましょ。



★テンポとフレーズ まずドラマーが必ずやっておくべきことは、演奏する楽曲のテンポを確認できるようにしておくことです。本番では緊張や焦りからテンポ感がおかしくなってしまうことがあります。

普段の練習の時から演奏前には必ずメトロノームで確認するようにして、できれば本番前も確認できる準備をしておきましょう。個人練習でもメトロノームに合わせて練習をして、ズレてしまう部分を重点的に修正しておきましょう。

本番が近づいて、どうしても叩けないパターンやフィルインは、無理なく叩けるフレーズに変えてしまうことも、バンド全体のことを思えば間違いではありません。

★セッティングの確認 ライブで使うドラムセットは、普段のものとは違うことも多いと思います。セッティングしづらかったり叩きにくく感じることもあるかもしれません。なるべくいつもと同じように調整したいところですが、はつきり言っておく

部分は諦めるしかありません。せめて、本番で使用するドラムセットのタムのインチと深さ、タムホルダーの形状、シンバルの数などを事前に確認しておき、できるものは前もってシミュレーションしておくこと安心です。

持ち込み機材が多いと転換に時間がかかります。あまり叩かない小物はセッティングリストから外すなど、持ち込み機材をなるべく少なくしていくことも選択肢の一つです。セッティングにどのくらい時間がかかるのかを事前に測って、効率の良いセト

トエンジニアの練習もしておきましょう。反対に、演奏面で最も影響するペダルは自分のものを持参する方が良いでしょう。使い回しのペダルを好みに調整している時間はありません。普段使っているものが使えなければ購入も視野に入れておきましょう。また、スネアを持ち込むのであれば、打面ヘッドは前日に張り替えて少し叩いておく

と皮が馴染みます。**★音量のバランス** 大きな会場ではドラムにもマイクを立てます。叩く音量が小さ過ぎるとマイクが音を拾わなかったり、突然大きな音を出すとスピーカーが壊れてしまう可能性もあり、音量の加減が大切です。普段からバランスの良い音量での演奏を心がけましょう。

また、スネアを叩いた時のサウンドの安定度、3点（スネア、バスターム、ハイハット）の音量バランス、フィルインの音量などもチェックしておきましょう。



★フレーズの整理 既存曲をコピーする場合、たくさんキーボードのフレーズが入っていて、どうしても演奏できない場合があります。また、高度なテクニックが必要で再現できないことも多いと思います。全体像を把握して、セクションごとに必要なフレーズを取捨選択したり、どうしても不自然ではなく似た感じに聴こえさせられるかを検討しておきましょう。スプリット機能を使ったりフレーズを簡素化するなど、有効な手段を考えて早めに整理しておくことで、やることははっきりして練習に臨めます。

複数の音色を連続して変えなければならぬ時も、なるべく音が途切れないようにスイッチングできる方法を考えておく必要があります。ボタンを押すタイミングを見つければ良いのですが、ペダル類を使っている場合も操作方法があります。また、本番は立って演奏するのであれば普段から立って練習しておきましょう。

★音作りの整理 キーボードの事前準備には音作りが不可欠です。例えば、ピアノの音色で演奏する場合、楽器にプリセットされているすべての音色で弾いて確かめ、バンド練習時に内蔵エフェクターやイコライザーを使って音色を整えていきます。使う音色すべてを同様に試しておきましょう。演奏で使う音色が決まったら整理しておきます。作った音色や音量を保存できる機種の場合は、リネームしてライブで使う順にセーブしておくことが便利です。

本番で会場のキーボードを使用する場合は、必ず事前に機種をリサーチしてUSBメモリなどで自作の音色を取り込めるのかを確認しておきましょう。取り込めない場合は当日の音色作りに時間がかからないように、事前に楽器店で本番と同じ機種を触ったり操作を調べておけば安心です。

★セッティングの確認 本番の会場ではキーボードスタンドが使い慣れないものの場合もあるので、事前にスタンドの種類も確認しておきましょう。普段使っているものを持ち込めればベストです。当日のセッティングは高さ調整以外にも、電源コードを挿す、シールドケーブルをDIE（ダイレクトボックス）につなぐ、ペダル類を準備する、音色を確かめる…と、たくさんあります。普段から素早くできるようにしておきましょう。

大きな会場ではステレオで出力することが一般的です。なるべく普段の練習の時からステレオで出力するようにしましょう。

アンサンブルとして

バンドやユニットで演奏する利点は「1人ではない」ということです。メンバー同士で助け合い、おぎなひ合うことで演奏が「1+1=2」以上のものになります。しかし、逆に言えば、1人ひとりが個々にどんなに頑張っても、全員でまとまった「合奏」ができていなければ良い音楽にはなりません。本番までに、個々の技術力を活かした「全員で音楽する」ことの最終確認をしましょう。

音量のバランスを取る

普段の練習場所とライブ本番のステージでは、広さや部屋の共鳴、使用機材などが違うため、当然ながら自分たちが出すサウンドや聴こえ方は変わります。大会や広いステージに慣れていれば予測をつけて音作りをしておくこともできますが、経験の少ない人にとっては未知の世界です。

しかし、どちらにしても当日の微調整は必要となります。例えば、ギターのエフェクターのかかり具合、ベースとバスタームの低音域のマッチング、キーボードの音色ごとの聴こえ方、スネアの響き具合…などは、サウンドチェック時と本番でも変わります。普段から、ギターアンプやベースアンプ、マイクやキーボードを入力しているミキサー、ドラム全体のチューニングなど、各パートの音量や音色のバランスを常に注意して、演奏しながらでも微調整できるようにすることを目指しましょう。



▲ライブは「合奏」を披露する場です。力を1つに合わせよう

よっても変える必要があります。例えば、ギターはコード弾きからソロなどの単音になるだけでも、音圧に差が出て音が小さくなったように聴こえてしまいます。物足りないと感じたら、音色を変えたり音量を上げたりするための

エフェクターを用意したり、マルチエフェクターを使用する場合は変化がつくように設定をしておきましょう。キーボードは演奏が片手でも何とかなるのであれば、慣れないうちはポリリウムペダルよりも楽器のマスターポリリウムをいじってしまつた方が繊細に表現できると思います。他にも、キーボードによるメインリフのメロディやドラムのフィルインなど、音量や音色がおかしくないかをメンバー同士で互いにチェックし合っておきましょう。

リズムを合わせる

ドラムとベースは「リズム隊」と呼ばれますが、バンドのグルーヴはドラムとベースだけで作れるものではありません。それぞれが良いリズムで演奏できることが理想ですが、最終的にはドラムとベースによって作り出されているリズムの土台に、ギターやキーボードなどの他の楽器が乗り、さらにその上でそれらを従えてボーカリストが歌うという図式になります。

それぞれのパートが自分のやるべきことをしっかりと行いつつ、どこかで他のメンバーのことも意識していなければいけません。まずは、すべてのパートに唯一共通しているリズムをメンバー全員で共有しましょう。

ドラマチックさの演出を確認

良いアンサンブルのポイントは、技術的な



▲録音や録画をしてみて、客観的に音量やリズムが合っているかを確認



▲良いアンサンブルに有効なのは、メンバー同士でたくさん話し合うこと

ことやリズムを合わせることでだけではありません。メンバー間で気持ちが一つになっていることが最も重要です。歌詞の意味、楽曲のイメージや世界観、伝えたいメッセージなどが全員で共有されているかを確認しましょう。

ポイントは、そのイメージを音量のダイナミクスで表現できているかです。サビはどのくらい盛り上がるのか、対してAメロはどのくらい抑えるのか。セクションごとに決めた演出がきちんとできているか、そして、そのつなぎ目もドラマチックになっているかも確認しましょう。

「通し練習」で最終チェック

ライブ本番の日が近づいたら、本番のステージを想定して、セットチェンジから演奏終了後の片付けまでを含めた一連の流れをそのまま通して行ってみましょう。どんなタイミングで演奏を始めるのか、ギターソロはギタリストがステージの前に出るのか、エンディングでは何か決めポーズを作るのか。など、台本を書くように細かく行動を決めておいても良いでしょう。

大会や演奏会のルールに従って時間通りに素早くセッティングすることはとても重要です。大会であれば、時間オーバーは失格になる可能性もあります。時間を測って何度もシミュレーションしておきましょう。そうすることで、当日は慌てることなくステージに向き合つことができ、余裕を持った演奏ができます。

また、演奏前にボーカリストが何か喋る



▲ライブはスタッフとの共同作業。有意義なサウンドチェックが成功への鍵

練習を繰り返すと効果的です。

サウンドチェックの準備

ほとんどの場合、ライブ本番前には「サウンドチェック」を行います。誤解している人も多いのですが、サウンドチェックは本番前の練習時間ではありません。演奏者が良い環境で本番を迎えられるように、音響スタッフがバンドが出す音を確認したり、照明スタッフがバンドのステージングや演奏に合わせた照明を確認する時間です。

注意点は、「本番でやることをそのままやる」「サウンドチェックでやらなかったことは本番でやらない」ということです。例えば、本番でギターソロの時に音量を大きくするのであればサウンドチェックの時にやっておかなくてはなりません。予定外のことを本番で突然やってしまうとスタッフに迷惑がかかり、機材トラブルの原因にもなります。ライブは演奏者とスタッフの共同作業です。その気持ちを込めて、お互いに元氣よく「よろしくお願いします!」と挨拶しましょう。

そして、サウンドチェックは演奏者のための確認時間でもあります。セッティングの調整、音量や音色の最終的な調整、モニタースピーカーの調整などを行います。イベントによってはサウンドチェックの時間がごく短い場合もあります。普段の練習時に楽曲のどの部分を演奏すれば音響スタッフがわかりやすいか、何をチェックしておけば良いのか。など、スムーズに進めるための準備をしておきましょう。

リズムに変化が起きる箇所には全員で体の動きを合わせることも、バンドの一体感として映ります。

自分では大きく動いているつもりでも、撮った動画を見返すと意外とこじんまりしていた。なんてこともよくあります。歌ったり演奏している時に自分がどう見えているのかを何度も確認しておきましょう。とはいえ、慣れないのであれば無理に大袈裟なパフォーマンスを考える必要はありません。全員がしっかりとリズムに乗れて共有できていれば、その体の動きだけでバンドの躍動感が出ます。

本番ではモニタースピーカーやマイクスタンドがあるので、自分の立ち位置からあまり動けなくなってしまうです。少しオーバー気

ステージングとして

大会では演奏力だけではなく、元氣良く若さ溢れる高校生らしいパフォーマンスが賞の獲得につながることもあります。しかし、大会に限らず、ライブ本番では自分の演奏やバンドのアンサンブルが崩れないように注意しながら、客席に対する「視覚的な表現」も求められます。本番への最終調整として、ステージングの準備も怠らないようにしておきましょう。

一体感を「演出」する

ステージング、ライブパフォーマンスなどいろいろな言い方をしますが、ライブでは視覚的な表現も大事です。ライブ経験が少ない人は、恥ずかしかったり自分の演奏で精一杯になつてしまつたかもしれません。まずは無理なくできることからやってみましょう。

ステージングのキーワードは「一体感」です。メンバー全員が一丸となってステージを作り上げる、その一体感を意識すればアンサンブルはまとまり、バンドとしてのトータルサウンドも良いものになっていきます。可能であれば、一体感の演出として「衣装」を合わせること効果的です。

表情、目線を考える

楽曲には、歌詞やアレンジに「感情」が含まれています。楽しい、悲しい、切ない、嬉しい、怒り、希望、失望、迷い…。楽曲の中でその

動きを考える

イントロやサビの前など「ここぞ」という時にはドラムの方を見たり、キメ、シンコペーションなど



▲本番を想定した「ライブ練習」をしておくと本番でも余裕が出る

POINT 照明でステージングがレベルアップ!



▲照明のイメージもみんなて話し合おう

本番のステージに照明がある場合は、ステージング演出のプランに組み入れましょう。事前に配布されているセッティング図に「全体的に青っぽく」「Aメロは薄暗い中でボーカルにピンスポットを」「ラストはリズムに合わせてピカピカして」といったリクエストを書き込んでおきましょう。もちろん、できることには制限がありますが、実は「お任せします!」という優しさが一番困ってしまう注文なのです。

味にアクションするぐらいが見ている方には自然に見えます。また、ギターソロでステージの前に出たり、ボーカリストがステージを大きく使ったりすることで、観客の目線は動き、ワイドなパフォーマンスに見せることができます。

POINT モニタースピーカーに慣れておこう



▲モニタースピーカーの調整は結構大事

ステージで各メンバーの足元にある「モニタースピーカー」は、自分の音や他パートの音を返してもらって自分の演奏や合奏をしやすくするためのものです。モニターの音作りのコツは、返す音なるべく少なくして必要なものだけを返してもらうことです。慣れていないと難しいかもしれませんが、ステージの中を演奏しやすい環境にすることを目指しましょう。

できれば、ボーカリストは普段の部活動でモニタースピーカーを使っていた方がベストです。常にモニター環境に氣にして、音量、スピーカーの向き、イコライジングなどを調整していると、本番のサウンドチェックでも好みのモニターが素早く作れるでしょう。演奏中でも修正の指示が出せるぐらいが理想です。

75th
TELECASTER®

すべては、ここから始まった。



The 1951
Telecaster.

The 2026
Telecaster.

Fender



音楽を続けるすべての学生たちへ

～和歌山・北海道で実施された軽音楽部支援プロジェクト～

フェンダーミュージック株式会社は中学校・高等学校の軽音楽系部活動を支援する社会貢献活動「Fender Youth Music Program」を実施しています。本プログラムは「Support players at every stage of their musical journey（音楽の旅路のあらゆるステージにいるプレイヤーを支援する）」というフェンダー社の理念のもと、軽音楽部をはじめとする音楽系部活動をサポートする取り組みです。



▲和歌山県立和歌山高等学校軽音楽部の皆さんと音羽 -otoha- さん、グエッリーニ社長



▲北海道小樽水産高等学校軽音楽部の皆さんとふみのさん、グエッリーニ社長

初年度なる2025年度は、全国から多数の応募がある中、和歌山県立和歌山高等学校と北海道小樽水産高等学校を支援校として選定。フェンダーの楽器やアンプなどの機材提供に加え、活躍するアーティストによる特別レッスンや交流イベントを実施しました。

和歌山・北海道の2校で 音楽支援プログラムを実施

両校で開催された贈呈式には、フェンダーミュージック株式会社代表取締役社長のジョルジオ・グエッリーニ氏も参加。ジョルジオ氏は生徒たちに「音楽は自信を与え、人と人をつなぎ、夢へ挑戦する力を育んでくれる」と語りかけるとともに「軽音楽部は単に演奏技術を磨く場所ではなく、仲間と協力しながら目標に向かって努力することや自分自身を表現する力を学べる貴重な環境でもある」とメッセージを送りました。

1校目の和歌山県立和歌山高等学校では、シンガーソングライターの音羽 -otoha- さんをゲ

ストに迎え、楽器贈呈式と特別レッスンを実施。自身で作詞・作曲を手がけ、等身大の言葉で若い世代から支持を集める音羽さんは音楽活動を続ける中で感じた悩みや挑戦についても率直に語り、生徒たちに「自分らしい表現を続けることの大切さ」を伝えました。

2校目の北海道小樽水産高等学校では、シンガーソングライターのふみのさんを招き、トークセッションやライブ、さらに生徒とのセッションを実施。オーディションプロジェクト「No No Girls」で注目を集め、その後アーティストとして活動をスタートさせたふみのさんは、夢に向かって挑戦を続ける自身の経験を共有。生徒たちとのセッションでは、音楽を通じて気持ちを伝える楽しさを届けました。

両校とも、アーティストによる生演奏が披露され、普段は動画や音源でしか触れることのできないプロのパフォーマンスを間近で体験した生徒たちからは大きな歓声が上がりました。音楽を「聴く」だけではなく、「体感する」特別な時間となりました。

また、両校は寄贈された楽器やアンプを早速、部活動で活用しています。フェンダーは機材支援だけではなく、アーティストとの出会いや音楽体験を通じて、学生たちがより豊かな音楽活動を続けられる環境づくりをサポートしています。

音楽を続ける環境づくりのために

軽音楽部は全国各地の高等学校を中心に、多くの生徒たちに親しまれている一方で、楽器やアンプなどの機材不足や活動予算の制約といった課題を抱える学校が少なくありません。Fender Youth Music Programは単なる機材提供にとどまらず、プロミュージシャンとの出会いや地域とのつながりを通じて、生徒たちがより前向きに音楽活動に取り組める環境づくりを目指しています。和歌山、北海道で出会った生徒たちの笑顔や演奏は音楽の持つ力を改めて感じさせてくれました。

Fender Youth Music Programは全国の中学校・高等学校における軽音楽部の活動をサポートする取り組みです。本プログラムを通じて、子どもたちが楽器演奏やバンド活動を楽しみながら、自己表現・協調性・創造力を育む機会を広げるとともに、軽音楽文化の発展と教育現場における実践的、かつ持続可能な音楽環境の整備を目指します。2026年度も実施を計画中。全国学校軽音楽部協会は本プロジェクトをサポートしています。

RECORDING
ENGINEER

MUSICIAN

VOCALIST



Be The Real Thing

CONCERT
STAFF

DANCER



コンサート・イベント科 職業実践専門課程

●コンサート制作コース ●コンサートPAコース ●コンサート照明コース
●コンサート舞台コース ●イベント企画コース

ミュージックアーティスト科 職業実践専門課程

●サウンドクリエイターコース ●プレイヤーコース ●ヴォーカリストコース

音響芸術科 職業実践専門課程

●レコーディングエンジニア専攻 ●MAエンジニア専攻 ●ラジオスタッフ専攻

ダンスパフォーマンス科 職業実践専門課程(浦田校のみ)

●プロダンサー専攻 ●バックダンサー専攻 ●ダンス&ヴォーカル専攻
●コレオグラファー(振り付け)専攻 ●ダンスインストラクター専攻
●テーマパークダンサー専攻

オープンキャンパス+体験入学

7/12(日)・19(日)・25(土)・26(日)

以降順次開催

軽音学部への部活支援を行っています!

若きつくりびとへ。
日本工学院
www.neec.ac.jp

日本工学院専門学校

〒144-8655 東京都大田区西蒲田 5-23-22 ☎0120-123-351

日本工学院八王子専門学校

〒192-0983 東京都八王子市片倉町1404-1 ☎0120-444-700

コンサート
スタッフ
の仕事

日本工学院専門学校/日本工学院八王子専門学校

裏方としてイベント
に携わる仕事です

音楽やエンタテインメントにまつわる職業や業界は多岐に渡りますが、一体どんな世界なのでしょう。今回はコンサートスタッフの仕事について、日本工学院専門学校/コンサート・イベント科の小保方ひなの先生に伺いました。

ーコンサートスタッフのお仕事全般について教えてください

小保方:コンサートスタッフの仕事は、一言で言うと「お客さんが最高の時間を過ごせるようにすること」ですが、その内容は幅広くあります。

ライブはアーティストがステージで輝いているように見えますよね。舞台のセットを担当する美術スタッフや楽曲の世界観に合わせてライティングを行う照明スタッフ、アーティストの歌や演奏が最高に聴こえるようにマイクやスピーカーの音を調整するPAエンジニア、舞台上の総責任者として、すべての動きを把握して調整・進行する舞台監督など、アーティストが気持ちよくパフォーマンスできるように支える仕事があります。

他にも、チケットを確認したり、座席までのご案内やグッズを販売したりする仕事もあります。また、ライブが終わった後は安全に退場できるように誘導する仕事もあります。ライブというものは人が一度に集まるので、混乱のないようにするのも大事な仕事になります。

ー入学前に、ある程度の知識は必要ですか。高校時代にやっておいた方がよいことも教えてください

小保方:入学前に特別な知識は必要ありません。ただし、コンサートやライブの現場では、音楽のジャンルや演出の違いを理解し、状況に応じて柔軟に対応することが求められます。そのため、入学前からできるだけ多くのジャンルの音楽を聴いたり、様々なアーティストのライブやコンサートを観たりすることで、自分の中に「引き出し」を増やしておくことが大切です。

また、ライブやイベントの舞台裏に興味がある場合はステージの作りや照明、音響の変化、

スタッフの動きなどにも注目しながら観ると、より深い理解につながります。実際にコンサートやフェスに足を運んで、観客の視点だけでなく、運営側の視点からもイベントを観察する習慣をつけるのもおすすめです。

ーお仕事の楽しいところや、やりがいを感じる瞬間を教えてください

小保方:たくさんの観客が集まるコンサートやイベントに運営側の一員として関わり、その舞台裏を知ることができるのは、この仕事ならではの魅力です。アーティストが最高のパフォーマンスを披露し、それを見た観客が感動し、笑顔になっている瞬間に立ち会えることは、大きなやりがいにつながります。自分が携わったイベントが成功し、多くの人の思い出に残る時間を作り出せたとき、特に大きな達成感を感じます。

また、コンサートスタッフの仕事を通じて、音楽の趣味の幅が広がるのも楽しみの1つです。普段は、あまり聴かないジャンルの音楽に触れる機会が増え、新しいアーティストやバンドの魅力を発見できることもあります。さらに、チームワークが不可欠な仕事であるため、普段の生活ではなかなか出会えない人たちと知り合い、一緒にイベントを作り上げる楽しさを味わえるのも大きな魅力です。時には忙しく、大変な場面もありますが、大勢のスタッフが力を合わせてトラブルを乗り越え、イベントが無事に成功した時の達成感は格別です。

ーお仕事の大変なところを教えてください

小保方:突然のトラブルやスケジュールの変更に対応しなければならず、常に緊急対応力が求められます。また、多くの人たちが1つの公演に対して関わっているため、全体のスケ

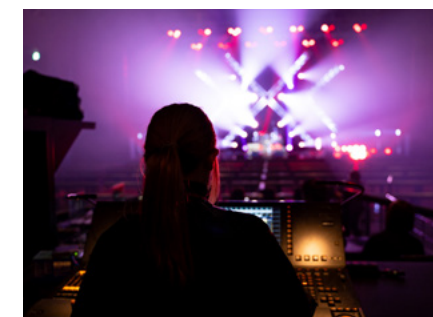
ジュールを把握するため、報告・連絡・相談を大切にしています。

ーコンサートスタッフのお仕事は、どんな人におすすめですか?

小保方:この仕事は音楽やイベント、エンタテインメントが好きで、誰かをサポートすることにやりがいを感じたり、常に面白いことを考えるのが好きな方に向いています。多くのの人たちと協力して作業を進めることが求められるため、チームで働くのが得意な人におすすめです。

ーコンサートスタッフの仕事を続けるのに大切なことは何でしょうか?

小保方:コンサートスタッフとして仕事を続けるためには、まず「エンタテインメントを楽しむこと」が非常に大切です。トラブルや急な変更が頻繁に発生する現場では「柔軟性と適応力」や「コミュニケーション能力」も求められますが、まずは自分自身が楽しむことで「楽しいこと」が生まれるため、エンタメを全力で楽しんでください。そして、楽しむために「体調管理」をしっかり行い、健康を維持していくことも大事なことの1つです。



▲お客さんが楽しむ環境を作っていく

NPO法人
全国学校
軽音楽部
協会



活動のヒントに生きた教材を！
出場バンドの演奏映像から学びませんか？

2020年から最新の春大会（2026年）まで、当協会の主催大会に出場した738バンドの演奏映像を公開中です。校外の、なおかつ大会参加レベルの他校の演奏から学べる機会は、なかなかありません。部全体の意識向上をはじめ、個人の感性を磨く機会として、他校の技術力や表現の深みを学び、自校の活動の参考にご活用ください。

第8回

高等学校
軽音楽コンテスト
関東大会

22 バンド



第11回

高等学校
軽音楽コンテスト
関西大会

22 バンド



第13回

高等学校
軽音楽コンテスト
中部大会

22 バンド



Pop & Rock Music,
Jazz

昭和音楽大学 | 昭和音楽大学短期大学部
ポップ&ロックミュージックコース / ジャズコース

オープンキャンパス

昭和音大を体感してみよう！

7/12 Sun 8/3 Mon 他

★＝対面のみ実施、学生によるミニライブ鑑賞あり

受験講習会

個人レッスンでプロの技を身につけよう！

8/29 Sat 9/26 Sat 他

●実技個人レッスン
●ポピュラー音楽理論
●DTM基礎講座 他

夏期講習会

受験生受講率No.1!! 夏休みにレベルアップ

8/1 Sat ~ 4 Tue

●実技個人レッスン
●ポピュラー音楽理論
●DTM講座 他

アンサンブルセミナー

本学教員がアドバイス!!
ジャムセッションを楽しもう。

9/26 Sat 10/24 Sat 他

〔個人またはバンド単位で参加可能〕

受験対策スクール
"パスウェイズ"
Pathways

無料体験レッスン受付中!

音大受験生に対し、
本学の講師陣が継続的に
レッスンをを行います。
オンラインも可能です。

〔対象：高校生（既卒者含む）、中学生〕

昭和音楽大学附属クリエイターズスクール
CREATOR SCHOOL

小中高生のための
音楽クリエイター育成スクール

新規開校!

▶ 日程や内容は変更となる場合がありますので、詳細や最新情報はウェブサイトをご覧ください。◀



お申込・
詳細は
ウェブで!

お問い合わせ / 広報室

0120-86-6606

nyushi@tosei-showa-music.ac.jp

〒215-8558 神奈川県川崎市麻生区上麻生1-11-1

オンライン個別相談、実施中! 平日11:00~18:00

本学教員・進学アドバイザーが質問にお答えします。(1回30分程度)

◎希望日の3日前までにお申込ください。

★タイガー大越客員教授は年に数回、特別レッスンを行う予定です。

